

空間あい サロンコンサート ～あなたに愛と調和と芸術を～

大嶋義実 & 佐藤直紀

ゴールデンデュオ・リサイタル パートII

Yoshimi Oshima & Naoki Sato Duo Recital

2本の純金フルートが紡ぐ
プラハの思い出

特別
協賛

Challenger
チャレンジャー音響株式会社

Green engineering
株式会社 しみづ農園

株式会社 丸越

2026年 8月3日 [月] 18:30開演 高崎芸術劇場音楽ホール

Monday, August 3rd, 2026 18:00 (Open 18:30) TAKASAKI CITY THEATRE CONCERT HALL

[主催] 株式会社 空間あい [後援] (公財)群馬交響楽団、高崎市、上毛新聞社、群馬テレビ、FM GUNMA

文化庁
Agency for Cultural Affairs,
Government of Japan

令和8年度 文化庁劇場・音楽堂等における
子供舞台芸術鑑賞体験支援事業

Program

B.スメタナ：モルダウ - 2本のフルートとピアノのための(佐藤直紀編) -

B.Smetana : Vltava pro dvě flétny a klavír, aranžmá SATO Naoki

佐藤直紀：響 - 2本のフルートとピアノのための

N.Sato : Kyou pro dvě flétny a klavír,

I 夏の今日 II 秋の京 III 冬の鏡 IV 春の響

F.ドップラー：ハンガリー小二重奏曲

F.Doppler : Duetto Hongrois Op.36

— 休憩 20分 —

P.ヴラニツキー：フルート二重奏曲 ニ長調 作品II-1

P.Vraničský : Duet pro flétnu D-dur Op.II č.1

I Allegro non troppo II Poco Adagio III Finale Allegro

F.&K.ドップラー：プラハの思い出

F.&K,Doppler : Souvenir de Prague Op.24

Profile



フルート 大嶋義実 *Yoshimi Oshima, Flute*

京都市立芸術大学卒業後、ウィーン国立音大を最優秀で卒業。プラハ放送交響楽団首席フルート奏者、群馬交響楽団第一フルート奏者を歴任。2024年まで京都市立芸術大学副学長・理事、同大音楽学部・大学院研究科教授を務め、現在同大名誉教授。日本音楽コンクール他、内外のコンクールに入賞入選。ソリストとして国内はもとよりヨーロッパ各地、アジア諸都市で毎年公演を行なうほか、プラハ響、群響、京響をはじめ数多くのオーケストラと協演。13枚のCDをリリース。2008年発売の《モーツァルト・フルート四重奏、協奏曲集》は「モーツァルト信奉者たちを統合するための全てを備えている」と仏ディアパソン誌上で評される等、日本、海外の主要音楽誌において高い評価を得た。著書「演奏家の語る音楽の哲学」が第1回音楽本大賞読者賞を受賞。他に「音楽力が高まる17の『なに?』」も好評を博し、音楽之友社版シュールホフ、マルチヌー「フルート・ソナタ」解説は邦文による貴重な資料となっている。



フルート 佐藤直紀 *Naoki Sato, Flute*

群馬県安中市生まれ。11歳よりフルートを始める。新島学園中学・高校を卒業後、京都市立芸術大学にて大嶋義実、ドイツ・ハンブルク音楽院にてヴァルデー・ケネン、ハンブルク音楽大学にてハンス=ウド・ハインツマンの各氏に師事。

その後、スウェーデンのヨンショーピン・シンフォニエッタ、同じくスウェーデンのノルランズ・オペラにて客演奏者を務めた後、2019年よりチェコ・フィルハーモニー管弦楽団の首席フルート奏者に就任。ソリストとしてチェコ国内のオーケストラと共演するほか、「笛僧」という名前で作・編曲活動もおこなっている。現在「季刊ムラマツ」にて、フルート奏者列伝『ドイツ・フルート奏者の系譜』を執筆、連載中



ピアノ 笠原純子 *Junko Kasahara, Piano*

国際ロータリー財団奨学生として渡欧後、ドイツ国立ザール音大大学院・国家演奏家資格課程を最優秀の成績で修了。ABC新人コンサートオーディション、ルービンシュタイン国際ピアノコンクール他入賞。ヨーロッパ、アメリカ、南米、ロシア、イスラエル、日本各地でのリサイタルの他、欧州各地の国際音楽祭に度々出演。ベルリン・フィルのコンサートマスターや首席奏者、ザグレブ弦楽四重奏団、チェコ・フィル弦楽三重奏団、同四重奏団、同六重奏団、ゴラン・コンチャル、イルジー・ヴォディチュカラとの室内楽、サンクトペテルブルク国立カペラ交響楽団、ザグレブ・フィル等、国内外のオーケストラとの協演も数多い。現在、大阪芸術大学、京都女子大学非常勤講師をつとめる他、IMAマエストロを主宰、三十年來のアレクサンダーテクニック研鑽を活かした演奏指導を行い、反響を得ている。ラプトサウンドより5枚のCDをリリース、好評を博す。

プログラムノートに代えて

大嶋義実

「まさかプラハで先生のレイハが聴けるなんて・・！」

感慨深げに彼がつぶやく。

「僕、まだ中学生の頃、今日と同じ演奏を群馬で聴きました。その時レイハのCDも買っています。先生のCDの中で一番好きなんです・・。」

この5月末日、チェコはプラハ芸術アカデミー・マルチヌーホールにおいて盟友ヤロスラフ・トゥーマ教授(鍵盤楽器奏者)と久々にレイハのソナタop.103を演奏した。

この作品を取り上げるにあたっては19世紀初期の楽器フォルテピアノを必要とする。おいそれと手にする事の難しい楽器のため、日本ではプログラムに組み入れる機会がなかなか見つからない。

そんな中、トゥーマ教授を応援の方が貴重なフォルテピアノを提供してくださり日本での公演が実現したことがある。それはちょうど世紀が変わる頃のことだったはずだ。群馬では桐生での演奏会だったように記憶する。

そんな四半世紀も前のただ一度の演奏を、今日の前にいる青年が覚えているという。

その青年こそ現チェコ・フィル首席フルート奏者佐藤直紀だ。

いわれてみれば、1990年帰国し群馬での活動を開始した筆者の出演するほとんどのコンサートに母親に連れられ必ず顔を出していた幼い男の子がいた。訊いてみれば、それはとりもなおさず彼本人だった。さらに驚いたのは先述のトゥーマ教授と行った新島学園でのパイプオルガンとのコンサートの折に、彼が同中学の生徒としてそれを聴いていたことだ。

実は世界的オルガニストでもある同教授は、安中市は新島学園礼拝堂にあるパイプオルガンをここのほか気に入っている。今も彼の口から「アンナカオルガン」という言葉が飛び出すほどだ。教授も自分の弾く「アンナカオルガン」を聴いて育った中学生が、今やチェコで活躍する音楽家に成長していたことに、世代を超えてつながる不思議な縁を感じていたにちがいない。

当初は、母親に連れられフルートの響く会場に座っていただけの彼は、長じて自らその楽器を手にしたようだ。当時桐生市の主催するジュニアオーケストラの音楽キャンプにフルートを持って現れた。毎夏行なわれていたその催しで、彼はめきめきと頭角を現し、いつの間にか《アルルの女「メヌエット」》のソロを担当するまでに実力を伸ばしていた。

群響を辞し京都市立芸術大学で教鞭を執っていた筆者の前に再び彼が現れたのは2007年だ。3月とはいえ寒気が残るなか、同大入試に彼の顔を見たときは、心のどこかに「やっとここに来たか」との思いも去来していた。

その後の彼の足跡はプロフィールにある通りだ。

彼も筆者も、本人が気づかぬうちにどこかチェコの人々の好む音を紡いでいるのだろう。特にプラハで勉強したわけでもない二人の笛の音が現地の人々に受け容れられているのは考えてみれば不思議なことだ。

あえてその理由を探すなら、ヨーロッパの辺境ボヘミア(チェコ)の風土が醸す郷愁に、同じくアジアの辺境に生きる我々の魂が共鳴するからではなからうか。

でなければ、スメタナの名曲《モルダウ》(チェコ語では《ヴルタヴァ》)に歌詞をつけて合唱曲にしてしまう、などという、アクロバティックな発想は生まれようはずもない。しかもそれは教科書にまで採用され全世代に親しまれている。

その話をチェコですると、日本人のこの楽曲への偏愛ぶりに驚きを通り越し、奇異なものを見たような目をされることが度々ある(ドヴォルジャークの「家路」も同様だ。)

本日はフルートデュオ+ピアノのトリオ版《ヴルタヴァ》を最初に演奏しよう。

編曲は近ごろ[笛僧]名義で活発に編曲活動を行う佐藤その人だ。幾度か改変を施された最新版の、笛僧編「ヴルタヴァ」をお楽しみいただきたい。

名曲の数々を編曲してきた[笛僧]がいきなり作曲に乗り出した。「チェコといえば《モルダウ》というように、日本といえば《・・》のような音楽があってもよいはずだ」そんな笛僧の思いが聞こえてきそうな彼自身の作品《饗(Kyou)-2本のフルートとピアノのための-》を次に奏しよう。

1, 夏の今日、2, 秋の京、3, 冬の鏡、4, 春の響

と短い四つの楽曲が聴く人それぞれのKyouのイメージを喚起する。

第1部はあの《ハンガリー田園幻想曲》の作曲者F.ドップラーによる《ハンガリー小二重奏曲》で締めくくろう。ドップラーは実は現ウクライナのリヴィウの生まれという。民族的にはハンガリーの血を引いているので、ハンガリー風の調べはお手の物だ。ちなみにリストからの信頼厚く、《ハンガリー狂詩曲》など彼のオーケストラ曲のほとんどはドップラーの手によってオーケストレーションが施されていたらしい。

第2部で奏するフルート二重奏曲の作曲者ヴラニツキーの名を知る人は少ない。モーツァルトがウィーンで認められず苦労を重ねていたことは知られた話だろう。では、売れないモーツァルトを横目に、当時ウィーンで売れていた作曲家は誰だったのか。それがヴラニツキーだ。モーツァルトとも親しかった。ただ、貧困にあえぐ自分を差し置いてウィーンで人気を博すこのチェコ人の友に、内心忸怩たる思いをモーツァルトは抱いていたのではないだろうか。

ところが運命のいたずらは、その友の故郷チェコでモーツァルトを人気者に仕立て上げてしまう。ウィーンでは失敗に終わった《フィガロの結婚》がプラハでは大いにウケた。それに気を良くしたモーツァルトがこの街のために書いたオペラ《ドン・ジョバンニ》も大ヒットを記録。

生涯で最も幸福なひとときを彼はプラハで過ごす。その思い出は栄光の日々として、いつまでもモーツァルトのところに刻まれていたにちがいない。

その死から約半世紀、モーツァルト同様やはりヨーロッパ中を旅した天才フルーティスト兄弟フランツ&カール・ドップラーもまた、よほどこの街に気に入られたようだ。彼らの残した陽気な《プラハの思い出》でコンサートの幕を閉じよう。

大嶋 義実

「演奏家が語る音楽の哲学」

(講談社選書メチエ)

在るものに無いもの、無いものに在るもの、それは音楽。
クラシックの作曲家が残した楽譜は音楽そのものではない。
音符を音として立ち上げ、音楽にそのものとして表すのは演奏家である。では、演奏家とは何者なのか。演奏家=音楽家とは、譜面を掘り起こすことでそれまでの「不在」であった音楽への扉を開き、広く交歓を可能にする想像力を持つものである。音楽からの呼びかけに応え、楽譜の向こう側にある音楽を蘇らせること。音と芸術と人間のかかわりについて第一級の演奏が語る。

2022年5月12日講談社より出版!

本日ロビーにて、サイン入りで販売!ぜひご一読ください。



大嶋 義実:著
四六サイズ 224頁
出版/講談社
価格/1,760円(税込)



大嶋義実&佐藤直紀
ゴールデン・フルートデュオ
プラハ 聖ルドミラ教会にて 2026年6月3日

文化庁「劇場・音楽堂等における子供舞台芸術鑑賞体験支援事業」に参加された
18歳以下の方へ



アンケートのご協力を
お願いします。



本日は演奏会にご来場いただき、
誠にありがとうございました。

18歳以下の方、ご来場いただいた方は、
終演後に少しお待ちいただけましたら、
舞台上で本日の出演者と一緒に
記念撮影をしていただけます。
撮影したお写真は、後日メール、またはプリントを郵送にてお届けいたします。どうぞよろしくお願いいたします。

この度、本日の公演を実現するにあたり、
匿名を含めてご協賛いただき、
ありがとうございました。

チャレンジャー音響株式会社
株式会社 しみづ農園
株式会社 丸越

株式会社 藤田ビジネスプロモーター 松浦幸雄 様
株式会社 雪草楽器 ミューズ音楽工房
中澤行政事務所 比呂企画
佐藤とし子 様 株式会社 エムワイ工業
株式会社 フェドラ



あなたに愛と調和と芸術を
株式会社 空間あい

株式会社 空間あい 代表取締役 新井 淨

〒370-0087 高崎市楽間町 280 番地 14 Phone 090-1815-4608 Fax 027-344-1582

【E-mail】info@kuukanai.com 【HP】https://kuukanai.com 【ONLINE SHOP】https://shop.kuukanai.com